

國學院大學學術情報リポジトリ

段注の隣り合う「意」と「志」とについて：
二字の段注が引く典拠などを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-12 キーワード (Ja): 『説文解字』（説文）, 『説文解字注』（段注）, 段玉裁, 轉注, 凡例 キーワード (En): 作成者: オオハシ, ユミ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000143

段注の隣り合う「意」と「志」とについて

一二字の段注が引く典拠などを中心に―

大 橋 由 美

キーワード

『説文解字』（説文）『説文解字注』（段注） 段玉裁 轉注 凡例

要旨

乾隆・嘉慶期（1736～1838 ごろ）に最盛期を誇った所謂清朝考証学においては、論拠を極めて重視した。文献を客観的な証拠として積み上げ自説を展開する学問態度では、博搜しながら厳選した根拠自体に説かせる方法は慎重である。段玉裁（1735～1815）が後漢許慎（和帝・安帝期の人？）『説文解字』（説文）の注釈書、畢生の大著『説文解字注』（段注、1815 年成）に引く典拠が、その態度に適って独得であることは言を俟たない。

意と志とは「意、志也」、「志、意也」と互いに訓まれ、説文の体例に従い隣り合い排される轉注で典型例と言える。轉注とは段氏が生涯弟子としての禮を尽くして仕えた師戴震（1724～1777）自信の説である。この二字を中心に、段注一書における凡例として師説を発揮した段氏は如何に注したか、特に自説展開の論拠とした引用例の特徴を中心に各例が段注で行論上如何に機能し影響したか考察する。

その結果、①『論語』と『大學』、及び『詩』・『書』・『周禮』と『儀禮』『春秋左氏傳』（以上専著あり）・『禮記』から引く関係しあう用例、②言（発話部分）を主とし、③発話者は孔子（師）や子貢（弟子）、君主（王）、家臣、④その相手は孔子・子貢、君主・臣下たち、⑤話題は孔門（儒教）で重要な徳目（天道、礼・仁・孝、文武の道）や生き方や信条、君主と臣下の心得等、その論述法は一貫し周到と言える。同様な文言が「意内言外」や関連する文字の段注にも散見する。

はじめに

乾隆・嘉慶期(1736～1838ごろ)に最盛期を誇った所謂清朝考証学においては、論拠を極めて重視した。文献を拠りどころ即ち積み上げた客観的な証拠自体により自説を展開する学問態度をとる。一般に、博搜し厳選した可能な限りの証拠を挙げて畳みかけて説く方法は慎重である。段玉裁(1735～1815)が後漢許慎(生没年不詳という)『説文解字』(説文)の注釈書である『説文解字注』(段注)に引く典拠は、同時代の碩学同様に、この基本態度に適い沿って独得であることは言うまでもない。筆者はこの視点を基本として論じる⁽¹⁾。

段玉裁は、最初の研究精華である音韻学の専著「六書音均表」を戴震に送った。初めは認めなかったが後に高く評価した戴震に、師に対する礼を執り弟子として生涯仰ぎ仕えた。以後説文研究を志した段氏は、重要と考えた体例の研究から始めその成果(所謂凡例)を以て全体を整え、『詩経』・『尚書』・『周禮』を中心とする各論研究(『古文尚書撰異』・『詩経小學』・『毛詩故訓傳定本小箋』・『周禮漢讀考』)で準備を重ね、加えて『儀禮』と『春秋左氏傳』(『儀禮漢讀考』・『春秋左氏古經』)も研究し説文の注釈書である畢生の大著『説文解字注』(1815年嘉慶20年5月成)を作した。

「意志」と熟す意と志二文字は、説文ででは隣り合い排される。部首を心部で同じくし凡例に従い排された転注関係を明らかに表す典型例と言える。

15篇上叙5b(「五曰轉注。建類一首、同意相受。考老是也」)にありながら長らく諸説紛々としていた説文轉注について、戴震は「異字同義」即ち互訓であると説いた。「聖人復起、不易斯言矣(聖人が復起^{またた}ったとしても、この言葉は易えないのだ)」とその自信のほどを高らかに言い放った、と六書説の初め(15上4a「一曰指事」の直上の割注。出典『孟子』「滕文公下」)に段氏が記すほど核心的な説である。段氏は師及び年齢や身分にかかわらず学問的に優れた人物には敬意を払い礼儀を正しくし、優れた説と認めれば支持し従うと段注から看取できる。つまりこの二字の段注は師説の戴震轉注説によって説かれると言える⁽²⁾。

本稿では、轉注関係においた志と意を中心に、段氏は段注一書の凡例として師説を発揮し如何なる注をなしたか、特に自説展開の論拠とした引用例を中心に、各例が段注行論上如何に機能したか影響したか考察する。

本稿の凡例は、例えば、は所謂小篆で説文の見出し字、10下24b志は10篇下24葉ウラにある親字志(楷書)、以降の所謂説解には段氏の六書説。㊦基本義、㊧文字の構造が主であり、時に㊨～があれば別義や別説(師説や方言)、出典としての経書の該当部分などが加わる。仮に㊦や㊧が不明なら「闕」と明記される。①～は筆者の注記、❶～は出典・典故。他に筆者注、筆者補注があり、筆者考察などを記す。

1. 志「意也」と意「志也」

戴震轉注説は「異字同義」すなわち互訓である。二字はともに心を部首として(建類一首)互いに同義(同意相受、「A、B也」「B、A也」)であるから説文体例の原則通り字義が関連することを明示する隣り合う位置に排され典型的である。密接な関係にあると既に明らかな両字のうち、排される順にまず志の段注を読む⁽³⁾。

1-1 10下24b 志(大徐は「志、意也。从心之聲」とのみ記し意の前に置く)

𠄎⊖ 意也(意である)。心と𠄎く(心が^ゆ𠄎く)に従い(構成成分としてもち)、^シ𠄎はまた同時にその^{発音}聲。

⊖ ^{かんが}按えるに、此の小篆(篆文)は小徐(南唐 徐鉉)『説文解字繫傳』(所謂小徐本)には本来無く、大徐(徐鉉)が「意」の下で「志也」ということをば以って此に(志を)補い十九文の一つと爲した①。原来(大徐本)は「从心之聲」(形声)に作るが、今(私は)さらに又た二字(𠄎亦)を増し(会意兼形声)、大徐に依り此に次でる。

志が(許慎説文に)記録されない^{理由}所以については、『周禮』(春官宗伯26下)「保章氏」①(鄭玄)注「志、古文識(志は古文の識)」より^{たぶん}蓋古文に志は有るが識は無く、小篆ではともかくも乃り識字は有るからであろう。「保章(氏)」注では(その後も続けて注し)「志、古文識。識、記也(識は記である)」といい、『禮記』「哀公問」②(公曰「寡人蠢愚冥煩子志之心也」)で(鄭玄)は注して「志讀爲識。識、知也(志は識として讀む(読みかえる)。識は知である)」という。

今の識字は、『廣韻』^シ志韻(去声7・音はシ)と^{シヨク}職韻(入聲・音はシキ)二つに分けて解くが、^{しかし}而ながら古くは二音に分かれない。則り二つの^{解釈のことば}解義(釈義・解釈)も亦た相いに通じた②。古文は志に作るので、則り志とは(保章氏)「記也、^キしるす」で(哀公問)②「^チ知也、しる」である(しるして理解し知識としてとどめる)。

惠定宇(棟)さんは、『九經古義』巻16で『論語』(17子張)「賢者識其大(賢人はその大きなものを瞭解し…)」(の識)については、蔡邕(132/133～192)の漢石經(論語殘碑卷14)③では「志」に作り、(論語7述而)「多見而識之(多めに見てそうして気がつき識る)」は『白虎通(義)』(巻2)「禮樂」(を引いて識を)「志」に作り、『左傳』(僖公24年)は「以志吾過(それで以て吾が^{あやまち}過を^{かきとど}志めよ)」といい、さらに又た(昭公4年)「且曰志之(且つこれを^{しる}志せという)」といい、さらに又た(昭公13年)「歲聘以志業(^{としごと}歲に聘いてそれで以て^{つとめ}業と^{知ら}志しめる)」という③。

さらにまた(定公8年)「吾志其目也(吾は其の目を^{ねら}志ったのだ)」④といい、『尚書』

(商書・盤庚上)「若射之有志(これを射る 志^{堅い決意}が有る若うな)」⑤、『儀礼』「士喪禮」
「志矢(矢^{はか}を志^シる)」注は「志猶擬也(志は猶^シと擬^{ちよう}のようである)」という⑥。

今人は分け志こころざす向で一字(志:ココロが目指す、またその働き)、識記で一字(記:とどめる)、知識で一字(知:理解・実践を通して得た明確な意識とそれに対する判断)とするが、古くは祇だ一字一音(識:照章母 志韻 去聲 志小韻 職吏切 三等 開口)のみあった。さらに又た旗幟はたじるし(行動目標としての主義・主張)も亦た同様にほかでもなく即ち識字を用いたから、(この場合は)則り亦た同じく志字を用いてよい。

『詩(毛詩)』序(關雎)に「詩者、志之所之也。在心爲志。發言爲詩。志之所之不能無言(詩とは、志の之く所である。心に在れば志と爲り、言(音声言語)として口から發すれば詩と爲る。志の之く所、言が無いとはできない)」という。故に識は言に从う(構成要素としてもつ)。

「哀公問」(鄭玄)注「志讀爲識者」(読み替えよ)とは、漢代には志と識は已に殊ことなる字であったからである。許(慎の説文)は心部に志が無いことについては、蓋其たふん(殊なる字であること)をば以て即古文識としたから、それで識字の下(説解)に載せ失そこななったのであろう(千慮一失)。職吏切(シと発音)。1部。

筆者注

①今見る小徐本『説文解字繫傳』ではこの位置に志があるのは、後世の人が大徐本に依って補ったためという。この大徐の所謂新附字につき、大徐本(宋本説文)15下5aに「左文一十九説文闕。載注義及序偏旁有之今竝録於諸部(以下 モジ 左の文一十九は説文では闕く。注義及び偏旁に順序だててこれらを載せ有るとするために、今竝べて諸部に記録する)」とあり「詔・志・伴…𠂔・峯」19字を載せる。

②段説の古音分部(所謂17部説)は『廣韻』に拠る。識は2か所に出てそれぞれ音義などは以下。

1) 去声第7志韻では小韻代表字志シは「意慕也(こいしたっておもう)」。『詩』云「在心爲志」。『爾雅』(釈器)曰「骨鏃、不翦羽謂之志」。職吏切 七(『詩』に「心に在れば志と爲る」という。『爾雅』は「骨や角製やじりの鏃、翦りそろえない羽、これを志と謂う・志の意味である」という。職吏切(シと発音)(同じ発音は全てで七字)」の7番目に「識は標しるす・しるし識」で『禮記』に見える。本音は式シキ(入声)、8番目に後述「幟は本韻は昌志切(シ・穿母)、さらに又音は志シ(照母)」もある。職吏切。基本義で『詩經』序を典例とし別義は(經書である義書)『爾雅』の「箭鏃(鋭利な武器)」とする。

2) 入声第24職韻では、小韻代表字職「『爾雅』云「職、主也。常也」、『博雅』云「業也」、『字林』云「記 微也」。又姓。『周禮』有職方氏。其後因官爲姓。『風俗通(義)』云「漢

有山陽令職洪」之翼切 九（『爾雅』に「職は、^{もつぱらとする}主也。^{いつも}常也」といい、『博雅』では「業也」といい、『字林』では「記は、^{こまかい}微也」という」という。さらに又姓で『周禮』に職方氏があり、其の後に官職に因り姓と爲る。…」という。之翼切 九（之翼切）の組がある。

他に9番目小韻代表字職「説文云「常也。一曰知也」。賞職切 十」と同音字の式があり、段注は別義（知る）を採り識「^{シ ヨ ク}賞職切」。この組は諧声符式の文字を収める。

段氏は古は1字1音1義（文字の三属性）と段注中で屢々説く以外に「古は去声はなく去入で一類」（「六書音均表一」古四聲説）とし職は今音は入聲とする。『廣韻』は識（審書母 職韻 入聲 識小韻 賞職切 三等 開口）で「本来の音は式（審書母 職韻 入聲 識小韻 賞職切 三等 開口）」とあり入声で同音。

③ 後漢の蔡邕が隸書で揮毫した一字石經は残石碑の拓本は筆者未見。宋代洪适（1117—1184）が起こした残碑は『隸釋』卷14に「論語残碑」741字を収め、17子張22段中の1字志は「^{ママ}讀曰「仲尼焉學」子讀曰「文武之道未墜（注板本作墜）於地在人。賢者志（注板本作識）」の「賢者志」注に「板本作識」とある。（『隸釋』卷第14-12b「石經論語残碑」中華書局 1985年）

筆者考察 ○○～○○は、所謂起止のそれぞれ2文字。

以上から段玉裁は次のような條立てによって説くと考ええる。

A：按此～於此 志は後漢の許慎説文にない。宋代に至り小徐はそのままにいたしたが、大徐が心部「意」の前に「意也」として新たに付けおいた、と先ず説き解釈を始める。段氏自身も賛意を表明して以下に証拠を上げてその理由を示すのである。

B：志所～知也 許慎は（鄭玄のように）既に字体が異なる小篆（親字）識字があったので志は識の古文として、本来は識字説解下に載せるべきで、心部には載せないことになる。しかし、心部にも載せなかった。これは千慮一失というべきと段注はいう。以下証2件から古文は志に作りその場合は則り志とは記であり、知である。

証① 鄭玄注で許慎説を証拠だてる。志字が^{書きとどめ}記録されていない理由は、『尚書』（經書）の例は1『周禮』「保章氏」の後漢鄭玄（127～200）注「志古文識」と同注以下に続く「志古文識。識、記也」、2『禮記』「哀公問」鄭玄注「志讀爲識。識、知也」。

証② 音韻説的証。今の識字は『廣韻』では志韻と識韻に2分し各おの解釈する（即ち2義）。しかし、古は2音に分かれない（段氏古音説で共に1部）ので則ち2義ではなく同時に（各音の意味も）互に通じあった。志一職は同一（通じる）字義は職から記と知と説く。（「六書音均表一」古四聲説・古音義説参照）

C：惠定～擬也 戴震の師惠棟の例を用いてBより志と識が通用することを説く。段氏はつまり師説に従うのと同じように惠定宇棟（1697-1758）著『九經古義』（雜著類）から

時代順に例①～⑤を引き、併せて段氏独特の例⑥～⑧を追加して語義が分かれて文字が志と識とで分担して用いられるが、実はそうではないと示す。

証① 『論語』(子張 19 弟子たちのことば) 識が「しり記憶する」の例。

証② 後漢末の蔡邕(132/133～192) 熹平石經(宋洪适「論語殘碑」)は志に作る。

証③ 『論語』述而 7(孔子自身の発言・姿・行動に関することば) 識は「気がつく」の例。

証④ 『白虎通(義)』(後漢章帝 57～88、班固編纂)は(卷 2「五祀、社稷、禮樂」)「禮樂」で識でなく志に作る。

①は識(知り記憶する)が②志に作られ、③識(気がつき覚悟る)が④志に作られる。2組の識が志に作られた例で「知り記憶する」と「気がつき覚悟る」の2字同義で通用する(記憶するから気づき、よくしる)ことを説く。

本稿の例では「知る」を共通の義として(日本語では)「記憶する」、「気づく・覚悟る」とで「知る」との強弱や精度など小異なるものを排したのであろう。語彙を変えてそれを訳し表すのが日本語つまり翻訳・解釈ならば段氏の真意は「知る」一語の多彩さに基本を置くといえる。

④後⑤前の鄭注「保章氏」「志古文識・書き留める」を前で述べてここは省く。

証⑤ 『左傳』では志に作る例は「僖公 24 年・書き留める」、「昭公 4 年・記憶する」、「昭公 13 年・知る」がある。つまり、書き留めて、記憶し、知る。

④までの「書き留める」を受け志に作る⑤は「志^{書き留め}よ」、「志^{しる}せ」(以上命令)、さらにまた「志^{知ら}しめる(覚悟らしめる)」という「知る」意。即ち惠棟例の最後の義「知る」に同じようでも典拠の文脈上は発話者の命令、強い語気を伴う。段氏は、志字「知る」は書き留めて記憶させて、覚悟るに至らせる、と解く。

『九經古義』から続く以下⑥～⑧は段氏が自説立証の例とする。

証⑥ さらに又『左傳』「定公 8 年」は志「強く思う・ねらう」に作る。

証⑦ 『尚書』「盤庚上」は志に作り「目指す・狙う」(志向)。

証⑧ 『儀禮』「既夕禮」は志に作り「擬^{はかる}すなわち「擬^{熟慮}度する」である。

先行する文脈から「覚悟る(しらしめる)」を受けて論を進める段氏が選択した志の3例は、⑥(発話者)射手が意思をもってしたいと強く思い(願う)、⑦発話者王が射るものを目指して「ねらえ」、⑧「よく考えはかる」則ち「熟慮する」でこれらを受け締める。その主体は果たして上に命じられた下位にある者に相当する射る者であろう。

以上から、この段は惠棟「知」義の例を活用し出典そのものの背景や文脈を考慮して「志」義につき自説の展開及び説文志字注釈における「知」義の深さを示すと考える⁽³⁾。特に、発話者の意志や強い語気を伴う例は段氏の典拠全体の文脈解釈に基づくと考える。即ち段説は⑧擬は『廣韻』「箭鏃」義ではない。即座に「擬度」と説き論じ始める理由である。

D：今人～志字 Cのまとめであり、ここまでの結論である。

今人は志・記・知と意味ごとに字を変えるが、古は一字一音だけしかなく、更に（識別する象徴）^{のぼりばた}旗幟も識一字で足り、また同時に志を用いることもできた。

E：詩序～一部 始めにもどり発端となった疑問に答えると同時に、字書である説文の六書を説きつつ注釈を終える。

『詩経』の序を引き詩（生活を反映しその中から生まれ出た情感の發露が^{ふし}節奏と^{リズム}韻律を伴った^{ことば}語言）と志との関係は志が^{生まれ出て行}之^{音声言語}けば言が無いことはありえない、と説く。志（心にあるもの）ゆえに心部に、詩は言（志を口に出すもの）ゆえ言部に属するという。

また、前述「哀公問」鄭玄注「志は識に読み替える」から、許慎の後漢には既に志と識とは別字で別義で別音ゆえ各部首に属して収めればよいとなる。心部に志がないことについては、（志は他でもなく）即古文識であったのに識字の下（説解）に重文（異体字）として載せそびれたのである。職吏切（シ、入声でなく去声で読む。私の古音 17 部説では識も志も 1 部で入声と本来は同類であることがわかる）。なお、先学や碩学の説に対し段氏が「失」、すなわち千慮一失と評する場合、例の如く慎重に慎重を重ね熟考の上でのことと十分に理解できるからである。それなのにここで誤った、それは当時は古音説（時代を経ると音が変化する）という考え方がなかったからだ、という如何にも清朝の音韻学者として自負しつつ礼を弁えた段氏の表現が本例であろう。

以上を総括する。段氏は、始めに本来は二徐がともに新たに附したのではない志は大徐が校訂して心部のここに置くことに賛同し、終わりに許慎が逸した理由を文字と音韻の変遷との関係に思い至らなかったと当時の学問的状況（成熟度）のみ記した敬意を忘れぬ誠実さの表れといえよう（「六書音均表一」音韻随時代遷移説）。段氏は著者許慎を段注上で侮り貶めることはない。仮に段氏の見解と異なる、或いはよく引く鄭玄説が妥当と考えても、非難めいたことはほとんど記さず、一書を通じて読む読者（段氏が同時代に交わった学者のみならず後世を想定か）が控えめの表現でも自身の誠の解釈・主張・結論が誤りなく理解できるよう配慮に努めた、と筆者は見て取る（段注一書・『段玉裁年譜』参照）。管見の限り敬意の対象には自説を根拠としつつ「千慮一失」以外記録される表現は知らない。本稿の初めに明示した通り、段玉裁とは生涯に亘る師に対する態度を執筆においても堅持した人であると信じられる。

ある文字の形・音・義の相違は用法即ち六書すべてにまで及ぶ問題となる。字形は同じでも古今の時代差や地域差によって 1 字の義が通じて広がった結果多義をもち音も増す。段氏は説文研究に入る前若き日に「六書音均表」を著し戴震に示した。初めは一蹴した戴

震は後に驚愕し認めて「六書音均表序」を書いた。以降、段氏は古音17部説などを主とする各自説及びその後生涯を通じて折々に修正を重ねた音韻説を練り上げ、孜々として説文研究に励んだ。その成果が段注随所に反映されることは、すでに倉石武武四郎先生に詳しい(「六書音均表について」『支那學 小島・本田二博士還暦記念 十卷特別号』1942 他)。前置すべしと志は必要な諸説を駆使して解いたと言える。筆者は、許慎の時代にはできなかった考え方でおこりうることから「失」を用いたのは虚^{うわべ}のみではない気がする。

上述のように終始志の説解「意」が如何なる基本義かを説く。志が識・記・知・擬と関連する理由・論拠の出典とともに一義とは言えないほど多くの具体的な義が示される。段氏に依れば志の本義「意也」とはこれらの意が含まれるのである。文字の三属性(一字一義一音)は基本原則と疑わないが、時代とともに多様化すると、一貫した態度を堅持しつつもそれが積み重なった小学を研究する難しさも知れる。以上をふまえて、段氏は次に「意」を説く。

1-2 10下24b 意

意^シ ⊖ 志(→識^シ)である。⊖ 心と音とに従う(心の音^{こゑ})。⊖ 言(口から出るコトバ、音声言語)を察して而して意^イ(心で考えること)を知るのである。

⊖ 志は即り(直前に配された志の段注から)外ならぬ識^シで①、心が識る^{モノ・コト}所^{モト}であるから、意の訓みは測度^{はかる}(憶測して考える→擬度^{熟考}する)と爲り、記^キ(しるしとどめる→知)と爲る。②測(段氏1部)と訓むことについては、『論語』「母意、母必(子絶四、母意、母必…((先生は四つのものを絶たれた。自分の考えだけで)思いこまない、意地で無理にやりとおさない…))」(子罕第9)の如^{よう}なのは、「不逆詐、不億不信(子曰、不逆詐、不億不信…(ひとから詐かれるかと想像して判断しない、ひとが自分を信じないと根拠なくいい加減に想像する、…))」と。)(憲問第14)、「億則屢中(子曰「回也其庶乎、屢空。賜不受命、而貨殖焉、億則屢中」(先生がおっしゃった「(学問も徳行にも最も優れ最愛の)顔回はやはり道に庶^{ちか}いだろうな、貧しくて屢々^{いつも}(財布が)空であったが(貧乏にあっても富を求めず道に励む)。(一方同じくやはり秀才の端木)賜(子貢)は命^{天命}を受けないが而し殖^{金もうけ}した。億^{予想・思惑}すればその時はいつもの中したから」と。)(先進第11)では其の字(意)は俗に億に作る。①

記と訓むことについては、今人が記憶(定着させて思い起こす)というようなのが是れであり、其の字は俗に億に作る。(『禮記』『大學』に「欲正其心者、先誠其意(其の心を正さんと欲する者は、先ず其の意を誠にする)」(第一)というが、誠(段氏11部)は其の心が識ることを實たすことを謂う(十分にしる^{いみ}を謂する)のである。③(同上)「如惡惡臭、如好好色(惡臭を惡むが如く、好色を好むが如く)」は、此れこそ自ら謙^{つつし}みきらうを謂う(謂みする)。(「所謂誠其意者、毋自欺也。」如「惡惡臭、如好好色」、此之謂自謙

…（所謂其の意を誠にすとは、自ら欺いてはいけない）は「惡惡臭、如好好色」のようで、此れこそ自ら謙む（疑う）を謂うので、…）に注して）鄭（玄）は「謙讀爲慊。慊之言厭也」②（謙は慊として読みかえる。慊之言たる（慊の本義と本音とによって転じて一言でいえば））は厭ではなく「厭」であるという。

按えるに（9下22a）厭（迫也。圧して狭める8部）は當然（5上27b）厭（飽也。足也。於鹽切。古音在七部）と爲すべきである。厭ということについては、「足也（十分である）」であるからである。④

㊦ 會意。於記切（反切はイと発音し16部）だが1部なのは、古音は入聲於力切（リョクと発音）だからだ。⑤

筆者注

① 識は去声で職吏切（シ、段氏古音説1部）に読む。『廣韻』去聲志韻標識の意、典拠は『禮記』。本音式（入声）で同音 幟（本韻昌志切、又音志 1部）が次ぐ。

② 「即り外ならぬ」は読者が轉注説を理解するため直前に排された志の段注を指して言っただけだ。前注①も既に志字段注にある。義に重なる部分と文字の三属性から重ならない部分がある轉注なら、意の基本義志そのものが重ならない。この切り出し方で基本字義識の多彩な義のなかで取り出したのが①測度②記と理解できる。職は志で測度の「測（段氏古音1部）」は「志」の擬度（擬、同1部）と記（知、共に1部）と考えられる。即ち志と意の轉注関係は段氏古音説1部によって基本が成り立つ同部轉注で字形、字義、字音の相互関係とわかる。志の段注でいう「意」をふまえると更に広がった義をもつ。

③ 誠3上13a「㊦信也（人が言うことばはまことである）。从誠聲（11部）」

④ 鄭玄は当時盛んであった音義説による解釈で説くが、段氏は自身の古音説により一部修正する。先ず段氏古音11部謙（敬う・肅む）を隣り合い音韻説上は問題がない7部慊（疑う→突き詰める）にまで近づける。次に字音上よいが字義があわない7部厭は8部厭（迫也・圧して狭める。段注は入聲於輒切、又一剋切。八部）を合う厭（飽也。足也。於鹽切、古音在七部）と改める。厭は反切下字鹽（余廉切。古音在八部）でさらに下字廉（力兼切）は七部で隣り合い古合韻となる。音義とも段説で問題ない。実は『大學』は「厭讀爲厭。厭者閉藏兒也。讀みかえて（同部の）厭（中黒也。於琰切。八部）とし、厭く閉じて 藏る貌である（8部）」の注は、段氏は引申義として退けた。鄭玄説を尊重し自説を以て爲すべき修正と主張して説く「足る」意は重要と考えたのである。

⑤ 「六書音均表一」古十七部平入分配説から職は哈韵入聲へ入る。

筆者考察

意では用例はまず『論語』子罕9（孔子がなさらなかったこと）、憲問14（古代の賢人に

に対する賞賛)、先進11(先輩たちの文化的態度)から取る。一門にとって学ぶべき事例は孔子を始めとしすべて過去の人びとの「事例」から順に、先師の避けられた教えとしての「してはいけないこと」、古の賢人で賞賛すべき「行い」など、一門の先輩の一門に相応しい礼に適った「言動」などその言行と人柄に及ぶ例である。出典は段氏も専著のある経書『左傳』、『周禮』に『禮記』で、如何に国を治め人を治めるか、自らを治めるか、その方法(礼)を説く。

意には志とは異なる引用書が用いられ、A『論語』は幼きころより読み始めるべき道徳の基本書で学団が重要視する徳目を説く件を、B『大学』は儒家で重要とする人の「道」や自己修養を説く劈頭「三綱領八条目」から好悪を明確にする件を引いた。

宋の朱熹は、『礼記』から取り出した『大学』を最初、孔子と弟子たちの言行録として弟子たちにより整理された(弟子たちが先ずは読んだ)『論語』(現行本は鄭玄が関わり古文系「古論」を含む)と共に「道を説く」と解し選定した經典を四書として儒学を学ぶ者の入門書とした。清朝に至っても科挙の受験科目で、段注の読者には馴染みも理解の程も問題はなかったはずだ。AとBともに極めて分かり易い書からのみ引けば、改めて重要性を認識しまたなぜに引いたかとの心意・真意を察するに困難はなかったかもしれない。未だ全容が詳かではない筆者もいずれ段氏引用典拠について総括的私見を論じねばならない理由である。

さて段氏は研究論文集段注の読者は当然自身と学問を通じ深く交流する当代一流の学者を中心とする仲間(師、先輩格や後輩、弟子)を想定している。段注は単なる欲しい情報や知識を得るため(工具書類)ではなく、見解を議論し結果や意見を記録する場であった。説解で本義「志」とある以上、体例(凡例)を踏まえて轉注関係にあるとわかる直前の「志」を参照すべきと承知する読者にも、改めて先ず促す慎重さが看取できる。志「意也」の段注が意の段注で追加する本義及び六書(文字の構造と用法)に関する注釈として比較的簡潔である所以である。

A 志即～記爲：

・志=識(=意)は当然で直ちに新たな字義の情報を測度(擬度する・熟慮する)と記(しるしとどめる・知る)と示す。

識字段注は重要な本義が「常也」(『廣韻』・『爾雅』)であることを直ちに「当然意」とのみ断じて論を展開するが、晉漢には字体が混乱していたことを理由として始める。意とは「志也」、志とは『詩經』敍「心所之也」で、意と志と、志と識とは、古くは皆て通用した。心の存る所、それこそが意の義で所謂知識といい、『大學』「誠其意、即實其識也(其の意を誠にすは即ち其の識を實すである)」を引く。同様の文脈の注釈から志を受けねば始まらず広がらなかったからと考えれば重要な用例のほどが分かる。また、記(とどめて知る)の段注でも本義正につき「一曰に正は記である」と別説では正と記とは轉注と説く。

よって、本義は今字の疏、^{こまかくわけ}分 疏 て而して識る（志は職、『字林』「記、微也」即ち志）意とし、義書『廣雅』「釋詁」「註、紀、疏、記、學、栞、志（以上7字）は、^{しる}識である」を引く。転注関係にある志の多彩な意味を示しつつ8字全て共に「しる」義をもち職が明らかに代表字で、他7字中疏、記、學、志4字が段注と例に見えるのは効果的である。

・測は、『論語』（子罕第9、弟子たちが理解した孔子の言動を記す）の「子絶四」前半2項「毋意、毋必（自分の考えだけで思いこまない、意地で無理にやりとおさない）」のみ取りこの意なら文字は俗に億といい、「憲問第14」（春秋時代などの政治家の人物評論）から「不億（根拠なくいい加減に想像する）」と、「先進第11」（孔子に因る各得意分野の先輩及び後輩弟子たちの人物評価）からも根拠は示す。

・記の場合、今人が^{しるしとどめる}記 憶 なら其の字は俗に億と直ちにいう理由は周知の「先誠其意（先ずは心を審かにする、十分に識ること）」（第一）に見えるからである。

B如惡～足也：「先誠其意」は更に周知の「毋自欺也」で「自謙」であり、鄭玄注の慊即ち厭と解釈を重ねる。だが、説文の本義と自らの音韻説によりさらに厭であるべきと訂す。段氏は、つまり十分に（飽きるほど）知る（そして心にとどめる）が記の意味と説く。

1－3 字義からみた志と意の異同——隣り合う理由と意義

轉注とは、段氏が『爾雅』「釈詁」に既に見え古くからある既成字の活用法で、戴震が唱えた優れた説と説く「A、B也」「B、A也」型の同じ部首をもつ轉注「志、意也」「意 志也」だが、実際は文字の三属性が根本的理由で全く同義とはいえない。相互に通じて用いてもよく、字義の異なる点に注目すれば相応しい場面で区別して用いられる。筆者は、この2例を戴震が誇った轉注の原則的解釈に対する弟子である段玉裁の補足的説明、解釈と理解する。更に進んで師轉注説の根本原則に即して（やや）外れる場合は如何に原則に則し運用できるか、その実践が基本にあると考える。これまで見たように、考証学者として音韻学説を立てた段氏は2字の異なる実態、1字の多様な意味の広がり字形と字音とに起因すると典拠を示して説くことを忘れない。字義は本義と全く無関係に広がったとは言えず、また異なるようで相互に関連があり補い合う関係であると示したといえる。即ち意の本義を求めれば直前に志があり、志を求めれば直後に意がある。意は「志也」で志は「意也」ならば、体例を知る者たちは自然と相互に参照し合う可能性はもともと高いのである。志の注釈が長く詳しく意のそれは簡潔で要点を絞り無駄がない。意の注釈には志から予備知識を得て読めば分かり易いのだと知ると前提がある簡明さがある。意の基本義が要点を押さえ理解しやすい排列である所以に他ならない。段氏は宋本を評価して欠如した志を適所に排し、師説を用い心部の始めに重要な2字を備えるよう解釈を成した。

2. 出典

段注は、研究成果である自説を読者である研究仲間に問う或いは仲間の説に対する評価など記した学術書である。意と志との解釈に用いた出典は、そのような読者には広範で深長な理解が可能だから自説の論拠として漏れなく上げる証拠としては代え難い。歪曲し換骨奪胎して用いる論拠では選択する論者(段氏)をさえ読者が訝りかねない。自説の問題設定と展開と回答に対する順当な行論、結論や主張する「何か」のために厳選した重要な根拠の出典には、正に都合よく齟齬なく自説に適う著者独特の一貫した個性・特徴が備わるはずである。同じ語(用法)が類似の場面に見えても、引用例がある原書一書・章句全体が言わんとすることは容易く他にとって代わらない。清朝考証学では、その禍中に身を置き学び研鑽を積んだ一流の学者らには慎重な証拠選擇は見識を示し説得ある説と各例自らが明言するからである。

2-1 志の出典(時に原文も表示する)

① 『周禮』(第6春官宗伯26下)「保章氏」(鄭玄)注「志、古文識(志は古文の識)」

掌天星。以志星辰日月之變動、以觀天下之遷、辨其吉凶。星土辨九州之地、所封封域皆有分星、以觀妖祥。以十有二歲之相、觀天下之妖祥。以五云之物辨吉凶、水旱降、豐荒之祲象。以十有二風、察天地之和、命乖別之妖祥。凡此五物者、以詔救政、訪序事」。注「志古文識、識記也」…。○音義：識音志、又音試。…

「(保章氏は)天文^{てんぶん}を掌る。星辰日月^{ほしぼし}の變動^{たいどう}を志^{しる}すことをば以てなし、(またそれで)以て天下の(禍福が)うつりゆくこと^{うつりゆくこと}を觀察し、其の吉凶を辨て理解する。更に星と土とから九州を区別し封地や領域にあるそれぞれの星の影響により妖祥(吉凶の前兆)を觀察する。十二歳周期で天下の妖祥を觀察する。五雲の形態から吉凶、旱魃、大雨、豊作、不作の兆を見分ける。十二の風の向きから天地の調和や運命の変転による妖祥を察知する。凡そ此れら五つの星辰日月雲風とは、それで以て天子が(下に)詔して政治をたす^{たす}救け、訪ねて諸事を順序^{しる}に分け^{わけ}さだめる。」。鄭玄注「志は古文識。識は記である。・・・」。 (音義は陸德明『經典釋文』より)○識は音志、さらに又音は試。(十三經注疏本『周禮注疏』)

筆者補足 曆を作る天文官保章氏は、天体の運行を管理し星辰日月雲風(星座や太陽・月・風雲)の変動を觀察し世界の出来事の変遷を分析してそれらの吉凶を判別する。この判断を受けて天子が詔して各地に伝え、順序に従い安定した政治を行うことになる。春官卷末第27前の卷第26は、祝・巫(占卜し祭祀を掌る)、大史・小史(史官の長・邦国の繫世^{けいせい}と昭穆^{しやうもく}の記録官)、馮相氏(天文^{てんぶん}を相て王が臣下を統御する爵・録・廢・誅

の八枋の順の受け方が天位に會うか弁別する官）・保章氏、内史・外史（宮中で王が爵・録～他を管理するのを助ける職官と外交文書の記録官）の順に並ぶ。必ずしも上位の職掌とはいえない保章氏は、天文を観察してその吉凶の兆候を相て王の政治を助ける官職。

②（『禮記』）「哀公問」「公曰寡人蠢愚冥煩子志之心也」鄭玄注「志讀爲識。識、知也」（十三經注疏本『禮記注疏』）

哀公問於孔子曰「大禮何如。君子之言、禮何其尊也」。孔子曰「丘也小人、不足以知禮。」君曰「否。吾子言之也」。孔子曰「丘聞之。民之所由生、禮爲大。非禮無以節事天地之神也、非禮無以辨君臣上下長幼之位也、非禮無以別男女父子兄弟之親・昏姻疏數之交也」。…公曰「寡人蠢愚冥煩子、志之心也」。（注：志讀爲識。識、知也。冥煩者言不能明理。此事子之心所知也。欲其要言使易行）孔子蹴然辟席而對曰「仁人不過乎物、孝子不過乎物、是故仁人之事親也、如事天。事天如事親、是故孝子成身」。公曰「寡人既聞此言也、無如後罪何」。孔子對曰「君之及此言也、是臣之福也」。

（親に死別して間もない）魯の哀公は孔子に問ねて曰った「大禮とは何如なことで
すか？ あなた おことば では、禮はなぜそれほどに極めて尊いのですか？」と。孔子は（答えて）
曰った「丘 は小人ですので、それ以に禮を知ることは 不 足 しております。」と。
君主（である哀公）は「 否 。（王のわたしには） 吾子（小男のようなあなた）は
申しなさい」といった。（そこで）孔子は「丘はこう聞いております。民の由って生
きる 理由や手段 は、禮が爲めであることが大きい。禮で非ければ節度を以て天地の神に事
えることは無く、禮で非ければ君臣の上下と長幼之位を辨別する 手段
れば男女父子兄弟の（信賴すべき） 親 と昏姻疏數の交（姻戚間の親密さの程度）を
別ける 理由 以がございません」といった。…哀公は「寡人は（ぐらつき乱れ才知が働かず
わきまえない）蠢愚で冥煩な 子 ですが、これを心に志します」といわれた。（鄭玄
は「志は識に読みかえる。識は 知 である。冥煩とは理に明るくなれないことを
言う。此の事は子の心を知る所であり、其の要点を踏まえた実行し易く言いたい、と
（孔子が） 強くおもっ 欲 たことであった。」と注する。）…続く以下は、

孔子は蹴然としておそれ慎み席を傍らに辟きそうして（面と）對って曰った「仁人は
物に過ぎず、孝子は物に過ぎない、是の故に仁人が親に事えるというのは、天に事える
如 であります。天に事えるのは親に事える如であるから、是の故に孝子は（物ではな
く） 身 あるものと成ります」と。公は「寡人は既に此の 言 をお聞きしましたので、
如りに後に罪せられても何でもありません」と言われた。孔子は對えて「君の此の言を
お聞きするに及んで、是に臣下である 臣 にとっては 福 であります」と言った。

筆者考察

前「保章氏」の二つ前「小史」は邦国の繫世（父子相代わる系図）と昭穆（宗廟で祀る先祖の順位）を記録する歴史官である。これを受けた本引用例では自ら「惇愚冥煩^{後繼むすこ}子」という哀公は、『論語』では幾条でも名がみえる。在位14年（BC481）に史書『春秋』の整理を「獲麟絶筆」した孔子は2年後16年（BC479）に没した。「哀公問」で始まり同じ書き出しの短い全篇全てが孔子との問答で、その最初で大禮（大典）を問う。大禮は国家・朝廷における重大な儀式、特に即位の儀式、人の一生の中では最も重要な典礼儀式の冠・婚・葬・祭などである。大禮以後は、君子の行い、政、敬身、成親、成身、天道へと変化して進み問われ、その後が段注（段玉裁）が引く部分である。

哀公が自ら子といい葬儀や即位の儀式について尋ねたから一旦回答を避けた孔子は、王然として命じられたので再た丘と自称して遡った物いいで分かり易く具体的に礼の重要性を説く。公の反応の変化を逃さず面と向かい先述の実行し易く分かり易い礼は本質的ではない（「心が無い」と本心を語った。仁と孝とは天に事えることから始まると言った孔子に対し「（孔子の）言を大事にする」と態度を変えたことは、（事える）臣としての孔子の喜びであった。『周禮』『天に事える』は凡字段注にも引かれる。天道を知ることは重要と孔子は考えたが段氏も重要な考え方・主張と考えるのだろうか。

続いて詳細に説くが問答が繰り返されても「敢問人道誰為大？（敢えて問ねます、人の道は誰^{なにのため}為に偉大ですか）」と哀公が問うたので孔子は愀然として色を作り（憂え哀しい思いに沈み顔色を変え）て「君が此の発言をなさるに及んだので、（それならばと申せばそれは）百姓の徳にであります。碧臣（後述参照）は敢えて辭さずお對えすれば、人の道は政の為に重大なのです」と答えた。更に続けたあとと哀公の発言「寡人は発言^し愿たい。然らば正装の冕を付けて親迎すればそれで已に重んじているではないか？」にまた孔子は同じく愀然として色を作してそうして對えて「二^{家柄どおし}姓^{よしみ}の好に合致し、それで以て先聖の後を繼ぎ、それで以て天地宗廟社稷の主と為るのですから、君は何に^{なぜ}（それで）已に^{十分だ}重いという謂となさるか？」とまだ禮が理解できない君に答えた。孔子は以下このような長い問答の果て、12章目に「公曰「敢問、君子何貴乎天道也」。孔子對曰「貴其不已。如日月東西相從而不已也、是天道也。不閉其久、是天道也。無為而物成、是天道也。已成而明、是天道也。（哀公は「敢えてお尋ね申しますが、君子は何に^{なぜ}天道を貴びますか」と尋ねた。孔子は對えて「其の已むことなく続くことを貴ぶのです。日が西に傾き月が東に上る如なのは互いに従い続いて已むことがございません。是れが天道であります。其の久きに亘り閉じて終わらない、是れが天道でございます。無為にして物が完成する、是れが天道でございます。已に成^{できあがっ}ってそうして明く輝く、是が天道でございます」といった。）」とあり章

句最後の問答が段氏の引用部分である。孔子の言葉を聞いて徐々に哀公は言葉遣い、特に孔子の呼び方が丁寧に改まる。

人の道・天道について言を重ねて孔子が繰り返し答えるやりとりが前段にあり「志」は記録として残して「知る」義である。牛歩式に問いやっとならんと孔子に敬意を表す言葉に至った哀公がそれなりの理解を得た、と対座して忍耐強く問いに答え続けた孔子は立ち上がった。遂に自らを臣下（最早若くはないが仕え下位にある者）として幸いと口にした。結局魯は滅び、国の将来は弟子が担うためと教育に励んだ孔子だったろうか。繰り返し口に出して問うばかりで考えて実践を理解できない者を相手に、禮、天道を知らしめ伝えてゆき民を安んじる政治を行うようにと教育することにはどれほど忍耐が必要か、と思わせる。

さて、君に答え続けた孔子が自ら称した「碧臣」は重要な表現と考え、貝塚茂樹博士『論語』（中公文庫 1973）と倉石武四郎先生『論語』（世界文学大系 69 筑摩書房 1968）「陽貨 19」を参考に私見を述べる。この前には學而第三に同じ「巧言令色鮮仁」がある。貝塚博士は、「陽貨とは才知と武勇に優れるが国政をほしいままにした専制者で遂に魯国を追われ、反逆者に与した。このような人物に招聘され孔子が応じたことは、既存の政治思秩序を支持する保守主義的な儒教思想の大義名分からは背徳の所業と疑われたが、孔子が大理想のためには手段を択ばなかったといえなくもない」、「道徳を箇条書きにして徳目を述べることは、孔子学園での師弟間の教義の伝授の形式を示す資料として重要」といわれる。

本章句の解説には「混合色の紫色が原色の朱色を圧倒するのをわたしは悪む。扇情的な鄭の音楽が調和のとれた古典楽を混乱させるのを私は憎む。まことしやかな雄弁が、偉大な国家を転覆させるのをわたしは憎む」、「中国の古代では、赤などのいわゆる原色を正色、紫色のような混合色を間色とし、正色を間色より尊んだ。その色彩の価値体系が次第に変わってゆくのを、孔子は悲しんだ」、「…孔子は、新しいだけのまやかさが厳格な調和をもった古典の世界をつぶしていくのを、見るにたえなかったのであろう」とある。

この説から、碧は孔子が悪む間色であるので、自ら碧臣といえは「自ら新しいだけのまやかして厳格な調和をもった古典の世界をつぶしていく憎むべき家臣」となる。君の問いに忍耐強くあれほど応じて説こうと努るのにいかがであろうか。

段玉裁は鄭玄を重んじた邢昺疏に拠るはずである。倉石先生は「論語正義」陽貨 19 により以下のように解される。今回も全文を引き参照し考察する。（表記はママ）

先生「わが輩は物を言いたくない。門人たちはことばによって聖人を見るだけで、ことばでい

わなくてもはっきりしている天理の実際の動きを考えない、とすればただことばだけをつかまえても、なぜ

そういわれたかが分からないわけになる、そこで先生がこういわれたのである。」子貢 子貢はその一人である「先生がいつてくださらないなら、われわれどもは何を申し伝えましょう。」先生「天が何か物をいいますかね。四季はめぐりますし、万物は成長しますが、それが天理の動きで、物をいわなくともわかる、天は何かいいいますかね。聖人もその動静が直ちに道のあらわれで、物をいわねば分からないというものではない。」

倉石先生は、間色の碧を「不正、謂五方間色、緑紅碧紫聊黄色是也。」として「「惡利口之覆邦家」者、利口之人、多言少實、苟能悅媚時君、傾覆國家也（「利口の邦国を転覆するのを惡む」とは、口が達者な人は言多く實が少ない、苟に悦んで時の君主に媚びることが能^{てき}るから、国家が傾き覆えるからだ）」によって説かれる天の道（天理の実際の動き）にも言及される。

よって、筆者は、貝塚説を考慮し、すでに名に見える子貢が後の引用例にも見えるため、倉石先生説により「（敢えて辞去せず、惡むべき）利口の人のように多言を弄するが、しかし時の君に阿ることはせず国家転覆も諂らず」、「天道を重んじ従い節度ある禮の実践を通して、君と臣、父子の立場を弁え姻戚に妥当に親しむ国家をつくる政に参与することを願う」と言った、と読みたい。師として弟子の教育に当たる（物をいいたくない）孔子の、理想国家の伝統を伝えてゆくための困難を有態に記し、同時にそれを越えたときの喜びを記録すると考える。

以上は、「小役人」で利口を潔としない孔子が礼・天道を説くのは、師として学ぶ者（弟子）には理想国家（調和をもつ古典の世界）の伝統を伝えたいためであると考えられる。

③引用出典7例

孔氏旧宅の壁中より出た『論語』と『春秋左傳』にはともに古文（所謂壁中古文）が多い。古注に依拠する解釈をする惠定宇（1697～1758）が『九經古義』古文の識について論じる巻16から段氏が引くのは③の7例で、それ以外に自説の根拠と考えて引く古文の3例が④～⑥。段氏は④は『左傳』ゆえ「さらにまた」と惠説に続け、以下は『尚書』「盤庚上」の最終部と『儀禮』「葬礼」の続編という「既夕禮」から2例取る。

段氏は段注で師の師で古学と家法を重んじる惠棟を敬意を以て親しく屢々惠氏棟、惠定宇として諸説を引く。『九經古義』から取った『論語』原文は、

0.「賢者識其大」者、1.蔡邕石經識作志、2.「述而」云「多見而識之」、3.『白虎通』引作志、4.鄭玄注『周禮』「保章氏」云「志古文識」、5.『春秋』「僖廿四年」傳云「以志吾過」、又6.「昭四年」傳云「且曰志之」、7.「十三年」傳云「歲聘以志業」、皆古文識。『論語』・『左傳』皆出孔壁中、故多古文。」（唐）賈公彥（『周禮注疏』）曰「古之文字少志意之志、與記識之志同。後代自有記識之字、不復以志為識（古の文字では志意（の

意味の)の志は少なく^{しるす}記識(意)の志と同じであった。後代には記識の記字があることより、志をばもって識と為すことは二度となかった)。(魏)何晏「晉人改志為識、而古文遂不可攷。後人因循莫能是正、可慨也(晉人は志を改めて識と為し、而して古文(志)は遂に攷えられなくなった。後人は(これを)^{古いままに}因循して是正できなかったが、慨かましいことである)」。とあり、古に志字の字義が改められ(志はココロの意となってシルスの)識の意で用いられなくなったあとの時代にはもう是正できなくなった、と嘆く。

つまり、1. 志、2. 蔡邕(132・133～192)識、3. 志、4. 志古文識、5. 志、又6. 志、7. 志(皆古文識)であるから、0『論語』識は、後漢では1蔡邕(132・133～192)で識、2古文派孔安国(BC156-BC74)で志、3. 班固(32-92)で志、4. 鄭玄(27-200)で志古文識、『左傳』左丘明(生卒年不明、春秋末期)では、5. 志(僖公24年BC636年)、又6. 志(昭公4年BC538年)、7. 志(昭公13年BC528年)と作られる。古い時代ほど明らかに志に作り、後漢では古くは志だが許慎に近い時代の蔡邕は職だが許慎や蔡邕以後でも鄭玄は志に作る。段氏は古文派の鄭玄を重んじる。以下、各例0～6につき考察する。

恵棟が取り上げた0「賢者識其大」は『論語』(子張)の衛國の王族の孫である朝氏が子貢に尋ねた時の回答中にみえ、識は「知る」意。以下の解釈も倉石先生『論語』「子張」参照。

衛公孫朝問於子貢曰「仲尼焉學」。子貢曰「文武之道、未墜於地、在人。賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武之道焉」。「夫子焉不學」「而亦何常師之有」

衛國の公孫である朝氏は子貢さんにお問ねになった「仲尼さんは學問を学ばれたのはどこででしたか?」と。子貢さんは「(天にある)文王・武王(文武)の道は、ともに決して地に墜ちてなくなり伝わらなかったことはなく、還ってまた人にございます。賢人は其の中の大きな道理を瞭解し、さほどでもない人は祇だ其の中の小さな道理だけ瞭解するから、(周の)文王武王の道があることがないことはなかったのであります(ずっとかならずあった)」とこたえた。(また公孫朝氏がお尋ねした)「(賢者である)孔先生はどこで學ばれましたか」。(子貢さんは答えた)「(ですから)^{どう}哪して常にきまった師がおられましたでしょうか(きまった師などはおられず至る所で学ばれた)」。

筆者補注 孔子(BC555-BC479)は紀元前497年三桓氏の反撃(国政に失望)により仕えていた魯の官を辞し、弟子とともに国を離れて諸国を巡る旅に出た。孔子はこの後諸国を転々とした13年後(BC484?)に赴いた衛に滞在した。衛は孔子を迎えても冷遇し他国へ追いやったほど優秀な人材を手放す状況であったらしい。

子貢(BC520-446、また子貢^{カン}と書いた時期は筆者は未詳。貢は与える・貢ぐ)は魯、衛の

宰相となったという。師孔子を貶める或いはまたやや暗愚とも思える若い王族の問いに、(仕える?) 子貢は(孔子同様媚びず) 丁寧に応じて生前孔子は人や場所を選ばず文武の道(理想の時代周の文化)を学ばれたと繰り返し説いた。朝氏の問い方はその答えを知るにつれて、孔子の表現が字から敬語へと礼儀を弁えたもの言いとなっている点は「哀公問」に似る。

上述②「陽貨」の孔子は利口を嫌ったが弁がたち外交的政治にも長け雄弁で優れた弟子「言語には子貢」が、嘗て迎えながら師を追放した国の王族に阿ることなく礼を教えたことを記すとも見える。『史記』「仲尼弟子列伝」では非常に長く紹介され、孔子の優れて出来の良い弟子というようだ。「碧臣」を想起もする。

巷で礼を学んだ孔子は『周禮』「天官(冢宰)」にあるように国を治め、天下に通じ人民を安らかにするためのふさわしい礼を学ぶことが重要と考えた。BC505年以前に孔子は魯へ戻り長く仕官しない時期に弟子をとり教育することに励んだ。顔回や仲弓、子貢などの主要な弟子の多くはこの時期に入門したという。これら弟子たちは孔子が実践的に禮を学ぶことを身近に見て徳目の重要性は理解したであろう(『史記』「孔子世家」参考)。ゆえに、残碑のように子貢が師から直接見聞きしたことを一人で語ることができるのではないか。孔子の没後、三年の喪に服した唯一の弟子である。

以上より、この段の引用例は前②「哀公問」に似て政と弟子の教育に関することで、特に子貢が注目される。以下の例もほぼ同じ趣旨である。

1. 後漢の蔡邕の漢石經(論語殘碑卷14)では0「識」を「志」に作る。識より石經の「志」が古いとなる。『後漢書』「靈帝紀」と「蔡邕伝」が伝える漢代の熹平石經は、蔡邕が残した最古の石經で宋代に洪适が起こした殘碑が『隸釋』にありその「子張」の段中の1字志。

贛曰「仲尼焉學」。子贛曰「文武之道未墜於地在人。賢者志」

(若い) 子贛は「師(仲尼と称された成人後)のその時には學ばれました」と言った。

子贛は「文武の道は未だ地に墜ちず人に在る。(それは)賢者が^知るからである(とおっしゃっておいりました)」といった。

筆者補注 古い記録だろうがいつのことかよくわからないが蔡邕は見た『論語』と考えられた。明らかに②を受け③をふまえた内容である。子貢は子贛とも書き倉石先生の説に拠って解釈を試みる。

「仲尼(字)」は冠して成人となった孔子について(比較的若い頃の)子貢が、師である孔子がいつどのようにして、何を学んだかをいう。(若い)子贛が直接聞いた師の学び方と学んだ年代であることになり、直かに教えを受け伝える(伝統を守る)ことを意味し、孔子は学ばはじめたのは遅めで、且つ(それゆえ)意識して賢者より文武の道を学んだというのであろう。

そもそも倉石先生「子張」は、段氏にとって、志で引く蔡邕殘石碑と文意が同じなので

あろうか。倉石先生の解説が意義あることに勿論変わらない。ただ、残碑は「(子闕) 籟曰」で始まり問うた人は不明で「若い」子籟一人が言うのみである。筆者は、「志」の有無を論じる証拠としての残碑(欠字あり)が「子籟」を主語として師孔子が学んだこと(時期・内容・場所・方法)を言うことが重要と考えるのである。つまり、双方には、欠字の有無に関わらず共通して優れた弟子の子貢が孔子から直接聞いたような学んだ年代・方法と内容「道」を説くことである。倉石「子張」は衛公孫の態度と質問に忍耐強く繰り返し説き、孔子が哀公にとった行動に同じである。残碑ならば、年代の相違があり独白のように、まだ若く学ぶ(師に就き依然擬り既に雄弁かもしれない)子籟が重ねて説くのみで、即ち(言多く弁がたつが)子籟が既に師の言葉と教えとを学び伝えていることになるまいか。

2.『論語』7述而「多見而識之」(『十三經注疏』)の邢昺『論語注疏』は識に作り、校勘記に「毛本志作職。案志職古今字(志は識に作る。案えるに志・職は古字・今字だ)」とあり、志が古い。校勘記は段氏説とは明記しない。後漢の包咸(BC7-AD65、『後漢書』)の傳では、「(学びたい者が) 禮として來て學ぶことはあっても、(自分が) 往って教えることは無い。」と向かって言ったので子に師事させた高官があり、孝廉に擧げられ郎中に叙されて建武中に皇太子に『論語』を授けた)と古文学者孔安国(BC156-BC74)の注が付く(倉石先生訳参照)。宋代に邢昺は勅命によって『周礼』・『儀礼』・『春秋公羊伝』・『春秋穀梁伝』・『論語』・『孝經』・『爾雅』を朱子以前の伝統的な説で義疏とした。

子曰「蓋有不知而作之者、我無是也。(包曰「時人有穿鑿妄作篇籍者、故云然。」) 多聞、擇其善者而從之。多見而識之、知之次也。」孔曰「如此者、次於天生知之。」

先生が^おっしゃった^{たぶん}「蓋「知らないのに作る(妄りに書籍を作る)」者があるだろうが、我にはそれはない。多めに聞き、其の善きものを選びとりそうしてそれに従う。多めに見てそうして識るのは、(天性の何でも知っている) 知の次である」と。

筆者補注 文脈上職は「しる」意。礼を重んじると知り子を学ばせた者がいる程の師としての包咸と天生ながら知る^{うまれ}ほうが勝るとする孔安国が対比されるならば、この識は「多聞(伝え聞く)」後に「多見(実際に自分で見る)」して「しる」(前例1)、志はその識意だが、字形が異なれば全同とは言えないから深淺や広狭など程度差があり異なる「しる(しり心に留める)」で、まだ「知」が上か。1を受けた補足と読めよう。

3.『白虎通(義)』(79年成、班固32～92) 卷2「禮樂」では上述2「多見而識之」と識を「志」に作る。最初に新たに「異説並行、則弟子疑焉。」に始まる問い(問う者は不明)があり、孔子(子貢ではない)が答える。2「多見而識之」、1では引かれ^{ママ}ないが前述「文武

之道、未墜於地」、後続は前出「於地在人賢者志」であった。また、新たに孔子学団で学ぶ斯文（文章による知的学問）と樂（性情を養う実践的学問）の關係に密であること、聖人の道（文武の道）は文により伝えられてきた学問であること、それは聞いたこと（学問）を述べることによりまた同様に受けた学業を伝えることにある、と続く。

「異説が並び行われればその場合は則り弟子は疑^{はか}るのか焉。」と問ねられた⁽⁴⁾。問われた孔子には口に出した言^{ことば}があった。「吾の聞くところはこうです。説の善きものを擇んでそれに従い、多めに見てそれらを（心に）^{しるしとど}志める。（これで最上である生來の）知の次である。文王武王の道は未だ地に墜ちない。天が將に斯文を喪そうとしても、樂はまた同様に其の天の中に在る矣。聖人（文武）の道は猶ど文が（天の中に）有るようで、其の説を擬^{熟考}する所以である。（だから）聞いた所^{こと}を（作らず）述べることに^{この学問}ついては、同じく亦た各おの其の受ける（学んだ）所^{學問}を傳える而已だ」、と。

筆者補注 孔子が「述べて伝える」を実践的に教える例である。2「多見而識之」を受け（先生の教えと）異なる説がある場合には弟子は猜^{おしはかる}度^{熟考する}（擬度）するのでは」と誰かが問うて孔子自身が答える。

0「文武の道」（子貢曰「文武之道、未墜於地、在人」）については、それが今の孔子^{自分}のころにも地に墜ちないのは、聖人（文武）の道が喪われようとしてもみなが（わたし孔子から）学^{この学問}ぶ実践的な斯文に（それが）在るからである。それは積極性を持ち選択したためだ。やはり先ごろの「述べて作る（穿鑿して妄りに書籍を作る）」ではない。書物として作りはしないが私が聞いたことを^{伝授}述べることについては、自分がそうであったように同様に各人が特定の誰か師からだけでなく特定の場所だけでなく、其の受けたことを伝えるからなのである、と弟子への師として親身な対応と理解できる。学^{この学問}ぶことや方法が詳し目で具体的發展的また現実味を帯びる答えから、「知之次也」の「知」は「（心に）^{しるしとど}志めて瞭らかにする（明らかとなるまで知るよう熟考する）」程度に至ろうか。「生來のしる」の次であれ、弟子たちは、師孔子の口から出た孔門の学問（斯文と実践的な樂）について安心して信じて学^{この学問}ぶことができるというのであろう。そして同様にそう後世に斯文と聖人の道を伝えよ、と言い終えるようだ。

4. 鄭玄注『周禮』「保章氏」云「志古文識」は前出につき省略する。

5. 『左傳』「僖公24年」「以志吾過」で志に作る。

（前略）遂隱而死。晉侯求之不獲、以縣上為之田、曰「以志吾過、且旌善人。旌表也。

西河界休縣南有地名縣上○鄭之入滑也。滑人聽命入滑、在二十年…

(介子推は母と) 遂に隠れてそうして死んだ。晉侯は探し求めたが獲えられなかった^{つかま}ので、縣上をば以てそれを(介氏に与えた) 田^{土地}と為し、言った「(これを理由として) 吾が^{あやまち} 過^{しるし}を^{しるし} 志^{とどめ}よ。且つ(子推が) 善人(誠実で嘘をついたり人をだましたりしない^{あき} 道德的に優れた人物) であることを旌らかにせよ」と。

筆者補注 魯の僖公(または釐公 BC659-BC627) の在位 24 年春の記録。「昭公 4 年」
「且曰志之」は志とする⁽⁵⁾。子推の怨み言を口にすることを潔しとせず死を以てする強い意志を知った文公は、過ちを認めたのみならず、言^{ことば}ではなく行動によってのみ示した(過ちを知らしめた) 者を記録化することで讃え人人に知らしめ自ら忘れないようにした。この志は単に「しる」ではない。天子が士気を鼓舞するのに用いる旌字を用いたから、明らかに「しりそれをとどめる」より寧ろ「とどめよ」の語気がある堅い決意・命令で、聞く者達に意志ある積極的な行動を求めるものである。この意を忘れず極的な行動をと喚起した。この前段に死を選ぶ母と子の子推とのやりとりが記される。

子「猷公のお子は九人もおられたが、今では君だけが残られた。恵公・懷公はお味方もなく、国の内外から見放されてしまわれたが、それでも国が亡びなかったのは、これから栄えさせようとの天のお心であって、ご先祖の祭をお続けになるのは重耳どのの外にない。それは天のお力というもの。それなのに、誰やら彼やらはまるで自分が助け申したかのように思っている。何というあさましさ。人の者を掠めても盗人というのに、天の功を横取りしておのが手柄顔をするなどとは。下では罪を犯して正当と思い、上では偽り者をおほめになる。両方ともに道に合わぬ。もうこうした世の中には住んでおられぬ」すると母が言った「したが、自分で(殿に) 申し上げるがよい。このままで死にでもした日には、だれもお前の恨みが分からぬわけ」

子「いや、あからさまに悪口を並べたのでは、私も世間並みになってしまいます。自分の功を誇張するよりも、もっとよくないことになります。わたしはもう君にお怨みごとを吐き散らして、戴く禄を食べるのは恥ずかしい身になってしまった」

母「それならば、せめてお前の胸の内なりと、殿さまにお伝えしたらどうかね？」

子「ことばは身の飾りと申します。引っ込んでしまう身には飾りも何も要りませぬ」

母「それががまんでできるなら、母もいっしょに引っ込みましょうよ」

そしてすぐ母子はどこかに隠れ住んで(やがて) 死んだ。うわさを聞き、公は縣上の地方に介氏の田を定め、推の記念にした。そして嘆じて言うには、「こうしてわたしの手落ちを明らかにし、また正義の人の形見としておく」(竹内照夫『春秋左氏傳』(中国古典文学大系 2 平凡社 昭和 43 年初版)、また、野口定男他訳著『史記』第 9「晋世家」『中国古典全集 10 史記上』平凡社 昭和 43 年 参照。)

6. 同「昭公13年」「歳聘以志業」(『春秋左氏傳注疏』孔穎達疏・陸德明音義)は志とする。注に「志、識也」とある。

是故明王之制、使諸侯歳^{きまり}聘以志業(注:志識也。歳聘以脩其職業、閏朝以講禮)(この故に賢明な王の制度では、(諸侯の大夫を)歳ごとに聘き集めてそれで以て自分たちの事業^{すべき仕事}を志らせる。(注:志は職である。歳ごとに聘いてそれによって業を志らせるから、帰って担当の閏では朝にそれゆえ禮を講じる)

この志は「しる」、「明らかにしる」、頭にしっかりととどめる(記憶する)で、ここは使役に読む。直前の「明王之制」は『周禮』「天官」にある諸制度をいい、後はその制度から礼を諸侯に学ばせる(そして大夫から郷党の民に及ぶ)とある。文武の道の(具体的)実践といえる。各地の諸侯が記憶して帰った村で礼を講じれば各地に広がり残り伝わる。ここまでは、知って(理解して)「心に留める」(段説によれば、こののち擬度「熟考する」に達する)に至る理由である。ゆえに、筆者は、1で師孔子が(直接)語った古来「道が失われない」「記録する者がいた」を裏付ける例となると考える。

これより以下は以上を受けた段氏自らが引く出典である。

④『左氏傳』定公8年 魯が戦に臨んで兵士が弓で敵を射た時の発言「吾志其目也(吾は其の目を志^{ねら}ったのに)。」と。最早「しる」ではなく狙うだから明らかにより意志ある「(こころや頭に)強くおもう」である。さらにこれまでの用例とは異なるのは後続の以下。

魯人の顔息は(矢で)敵人を射て眉に命中させ、退いて曰った「わたしには勇気がない。吾は其の目を志^{ねら}ったのだから」と(自ら矜むことをばで以て言った)。

筆者補注 魯の定公が齊に侵攻し陽州で兵士が座り込み鬪志がない時に発したことばの例は、明らかに「しる」より強い意志「ねらう」と解せる。典拠の前後には、

(誰かが)「顔高の弓は六鈞ある強弓だ」といったので、皆が取って傳^{順ぐり}に觀てみると、陽州人が(撃ちに)出た。顔高は人から弱弓を奪った(抵抗した)。陽州人の籍丘子鉏が反撃したが、顔高は一人と俱に子鉏を斃^{たお}し(殺し)た。偃且が子鉏を射て頬に(一矢で)命中させ^{ころしたお}「殪」した。魯人の顔息は敵人を狙って射て眉に命中させた。だが、退いて「我には勇気が無い。吾は其の目を志^{ねら}ったのだから」と(それで以て自ら矜^{あわ}れみ)言った。師団は退いた。(猛^{つよ}い魯人)冉猛は足を傷つけたと偽り而して先に逃げ帰ろうと欲^{強く思}った。其の兄會^{結局}はといえば乃ち「猛は^{しんがり}殿だから」と呼んだ。

正義を為そうとするものは弱くそれを自ら告白して矜む。猛々しい者がわれ先に逃げて、親しい身内がこれを庇う。

とある。強い目的意識をもち狙って命中したのは志^{ねら}った的ではなかった、と自覚して

「勇気がなかった」と自ら矜むことばを口外に出したことから③の5『左傳』「僖公24年」介子推の言葉が浮かぶ。自ら手柄を誇らず、赤裸々な悪口を言わない、「ことばは身の飾り」と怨み言も王にいわないで消え去ったから、王は恥を知り志した。顔息が口に出したのは手柄でも悪口でもなく、自分が行動する時は自らの意志・覚悟の強さであり、相手と向き合った時は（狙いを完遂する）勇気だけだということである。

⑤ 『尚書』（商書・盤庚上7）「若射之有志」

「盤庚上」は盤庚が貴族である親戚の家臣らを集めて、彼らに向かって遷都する決意を述べる。前段では曾ての王と家臣との関係のように自分に従って欲しいという。引用部「若射之有志」はその終わり近くで、困難な状況下に在ることを告げて「予は汝らに困難をつける、（矢を）射る^{よう}若^{強い思い}な志があるか」と正直に問うて「矢を射て命中させよ」という王命を正直に口にする。最後に「これから後日に至るまで、各々が自分がすべき事（業務）を慎んで行い、齊して然るべき立場にあるように^{考えはか}度^シって口にせよ。（さもなければ）罰が各々の身に及ぶから悔やむことがないようにせよ」といった。前述哀公は以後何があっても恐れないと言ったことを思い出す。段氏は、司部9上29b 𠄎「意内而言外」段注でこの前段の件を引用している。

⑥ （『儀礼』）「既夕禮」）「志矢」注（釋文）「志猶擬也（^シ志は^{ちよう}猶^ギと擬のようである）」）。鄭玄注には「志矢は練習用の^や箭^{矢先の金鏃}で^鏃がない。」とある。

「既夕礼」（上篇「士喪禮」は父母の死に関する礼）は葬ること二日前に先んじて已に夕べに哭する時に^{とも}与に一日葬る儀節（行動や態度が適切でほどよいこと・礼儀と作法）について講述する。これらの礼儀作法には読み上げ宣言する陪葬品中に大抵矢は含まれ、その後に出棺を宣言するといふこの例も言に関する。經「猴矢一乘、骨鏃、短衛。志矢一乘、軒輜中、亦短衛（初めて生じた羽を付けた^{練習用の}志^矢一乘、軒と輜との中、亦た（猿矢と）同様に短衛）」に鄭玄注「志猶擬也」とあり志は「擬度」に読むと考えられる⁽⁴⁾。唐の賈公彦の疏では、

注志猶擬、至輕也。釋曰云志猶擬也者、凡射志意有所準擬、故云志猶擬也。云習射之矢者案司弓矢、鄭注云恒矢之屬、軒輜中所謂志（注は志は擬の猶うである、至は^{まっすぐ進む}輕である。（私賈公彦が）解釈して言うに「云志猶擬也」とは、凡そ射るには志意には^{こころ}準^{ねらいはかる}擬^{対象}る所があるので、故に「志猶擬也」というのだ。「習射之矢（射ることを習う矢）」とは、案えるに（周禮・虎賁氏）「司弓矢（弓と矢とを司する）」で、鄭注に「恒矢之屬（恒矢と庫矢の^{なかま}屬で、庫矢は的を定めずむちゃくちゃに発射する^{制御}散射^{あいだ}に用いる）」という。軒（前が低く後ろの輶が高くあがった車）と輜（軒と逆に前が高く後ろの輶が低い車）のようにどちらかに偏るのではなく（高低、優劣がないほどよいところに）中が所謂^{あいだ}志^{いわゆるねらいめ}だ。

とある。つまり、段注の引用部「志矢」は、鄭玄の注から志う程度がよい(矢)と解する。射撃を学ぶ場合乱射すれば的を狙えないが、鄭玄は志をかたよることない程好いところに命中するように狙う義と説くので、筆者は、^{強い思い}志意としては偏らず的を外さずほどよく狙う、と解する。この典拠『儀礼』『既夕禮』では全体として「偏らないことは節度ある礼儀作法」を講じており、段注引用例の意に適う。

筆者補注 ④・⑤・⑥は矢と関係する。矢は屢々「(その使用時の形容から)真っ直ぐに行く」と段氏は説き解釈を展開する(「知」段注参照)。引用例では⑤「狙う」、⑥「射て命中させる強い心」と戦に関係し、既夕禮では儀礼用で「仮(正式ではない)」練習用の兵器でも学べば「偏らない的」を射得る、狙えるようになるという。⑥「志矢」は⑤盤庚上「若射之有志」を「既夕禮」が引くので「士喪禮」ではなく「既夕禮」から引く。「既夕禮」のはじめに鄭目錄が「士葬礼」の下篇とするというので、段氏は分けずに直ちに言ったのである。

2-2 意の出典

①『論語』と『大学』から引くので師(孔子)と弟子に関する、特に学ぶ内容や方法についての用例が多い。『論語』を中心に、典拠とする「志(予想する)」の典故3例を引用順にまとめる。

A: 始まりの『論語』(子罕)第9「子絶四」前段に「志」がある。全文は割愛する。

B: 「憲問第14」中の「志」は、古の人として哀公、介子推に関連し、特に考えを明確に堅持し揺るがないところは母の賛同を得て死を選んだ介氏を後に王は賞讃の対象として評価した。王が顧みて自省し命じて自らの判断の記録としても残すべきとまで動かした件に「志」が用いられていた。弟子は明記されないがCとの関連で子貢が浮かぶ。

C: 「先進第11」では、孔門の弟子をとり上げ常に道に励む顔回と秀才子貢を、日常の実態から対比的に述べた件に志(予想する)がある。全体を通して子貢(子貢)に関する段は印象深い。特に倉石先生の解釈を示し参考としてまとめる。下線は典故箇所の解釈。

A「この四つはおたがいに関係するもので、思いこめば無理押しになり、執着すると我を張る、思いこむのと無理押しするのはあらかじめやることであり、執着と我とは事がすんでからのことである、また我を張るから思いこむのであって、ぐるぐるとどこまでも循環してゆく」。

B 小字で注釈をつけて「だまされないうちに だまされてはしないかといって 気をまわしもせず、疑われないうちに 疑われてはいないかといって 推しはかりもしないでいて、やっぱり先に 誠か偽りに 気がつくとしたら、それは賢いのだね」。

C 最後「先進第 11」で子貢（言語に秀でる）が 2 度出る。倉石先生は「賜は天命に安んぜず金もうけを考え、予想したことはよくあたる。」と注釈のうえ「子貢の金もうけといっても…ただ心にそのことが忘れられないだけである、それも子貢の若い時のことで、性と天道とのことを聞いてからは、そういうこともなくなっただけ。」と説かれる。

興味深い注釈で天道に言及した C 子貢（子贛）については前述のように大いに参考とする。例の配列 9 → 14 → 11 順は、弟子たちが理解した師孔子の日常的言動（＝師が学んだ道の実践）→教育内容としての当時の政治家の人物評論（＝政治に関与することを願う弟子に為政者の統治や斯学・道の理解修得の実際を教える）→師孔子から見た門第十哲などの評価（＝人物と道の理解度や内容）と子弟を教育する孔子の日常の様子とその折々の発言と考えられる。A 孔子は思いこまず無理押しされなかった→B 弟子が誠か偽りか（天道か否か）予め気を回さず推し測らずに気づくなら賢いと判断された→C A と B から若い頃子貢は執着するように予め考え予想したがよく当たった。（学んで）性（人の生まれつきの天賦）と天道とを聞いて知り理解した後は執着や推測はしなかった。またせずとも気づくので賢いと判断され、さらに残石碑の例のように自分が受け継いだ教えが将来に亘っても絶えることなく伝わると孔子が思われた、と筆者は考える。

筆者は、孔子自身が発する答え中の「志」の典故は、師孔子は博搜し選択的に学んだ禮・天道を弟子たちに教え、弟子たちは如何に実践したために後世に伝えて今に残るか、段氏がこの例の意図の重要性をまた読者でもある若い弟子たちに説くかと考える。敢えて言えば、段氏は、多義性を認める「志」で本心から願う「こころざし」をいうのではないか。

② 子贛の例を想起させる『禮記』『大學（成人が学ぶこと）』の重要項目は「先誠其意（先ずは心が十分に識ること）」は周知の典拠からの引用例で、この前後も人口に膾炙した宋の朱子（新注）の所謂「三綱領」「八条目」の「致知在格物、物格而知至」である。門外の筆者は学問的且つ体系的なことは不明ゆえ関係段落は示さず要点を記す。ご指正を乞う。

三綱領は「大學之道、在明明徳、在新民、在止於至善」で始まり、主として、ゆくゆく君主や宰相となるべき人に対するものである。その真意は、「為政者が教導して、人びとに生来の徳性を自覚し發揮させ、善政によって民心を常に清新に保ち、政治の理想を高く掲げて、至善（至極の善美）の世界を建設せねばならない」にあるという。そのためにどうすべきかはその後「修身治國天下平」の方法として「一身に修養を加えて優秀な人格とならねばならない。そのためには内心を正常に保つことができねばならず、そのためには意志が誠実に働くように努めねばならず、そのためには、まず理知を強くせねばならない。そして、理知を強くすることは、まず多く事物に接近して（事物の真相や真理を確

認し) 知識を豊かにすることから始まる」といい「天子より庶人に至るまで、同じくみな身を修めることを以て(学問の)根本とする。根本が乱れていて末端が整うことは無い。厚くすべき所を薄くし、薄くすべき所を厚くする、という仕方は無い。これが根本を知ることであり、最も大切な知恵なのである」という。特に「欲正其心者、先誠其意(その心を正しくせんと欲した者は、先ずその意を誠にした)」は段氏がこの前に出した『論語』引用例を彷彿するというべきである。

④・⑤・⑥は前述参照。

2-3 まとめ

実は志「意也」以下には意「志也」に次ぎ 25a 旨「意也」がある⁽³⁾。3字が轉注関係でも「志」と「意」では引く典拠例は少なく段注も多く説かない「意」が中心で中心の義である。前置する「志」は「意」に広がり齎し「声に出していう(いおうとする)」心の精度と強度を高める働きを補う。「意」は「志」の典故が所謂互訓以上に強く的確に影響した結果、字義がより細かに多彩に深まった。多言を弄せず単刀直入に脱字「志」を先ず「意」の前に補い置き轉注関係と断じてから一気に論を展開したことが功を奏した。師説の忠実な実践で発現した効果である。この順でなくしては段氏は尊敬する師の轉注説を機能させ実践することも十分ではなかったかもしれない。段氏は段階を踏み用意周到に自説を展開して、「意」を丁寧に説き得た。清朝考証学一流の執筆態度である。奏功した自説展開の論拠である引用例につき、特に頻出する内容・文言・表現に注目し簡潔に示してまとめとする。

① 典拠は、『詩』、『論語』、『書』、『周禮』、『禮記』(『大學』)・『儀禮』、『春秋氏左傳』、『白虎通(義)』

② ①中の発言部分：主に話者孔子、子貢(子贛)、哀公、盤庚などが発言する部分。相手を考慮すれば、孔子—哀公、子貢(子贛)—君主など、孝子(介子推)—母或いは間接的に王、王・盤庚—また上級の家臣との間などで質疑応答、教え諭し導く師と受業者、即ち師と弟子、国政に(将来)与る者(家臣)と君主、君主と家臣など。直接言ではない「志矢」は、身分ある(親しき)者を葬る際の副葬品として「宣言」する部分にある。

③ 古人が口に出して言った内容：

(1) 古人の言動・礼(儀)に適った行いの実例、学んだ者の心構え・希望、死をまじかにして(母・家臣に)向かって言う人の誠実な或いは理想の生き方の表明。

(2) 天道、天に事える(臣が君に、子が父に事えるのは同じようだ)、秩序ある身分・長幼・兄弟などの立場と関係の親疎、伝えて人にあり地にあり(あるのは伝えたからで、それが

できるのは学び選ぶ人の志次第)。また偏向せず節度ある行い(儀礼として)。

④ 碧臣(孔子が自らをいう)、子貢(多言で有能な弟子)は仮説とする。

以上、口に出すのは心の内なる思いで、意「○察言而知意也」で、『大學』「三綱領」「八条目」(全ては自身を修めることが重要でそれから始まる)を引き終る。

3. おわりに

頻出した語(1)3上22a 識、(2)3上18a 記、(3)5下25a 知、(4)4上16b 智につき一言付し置く。

(1) 識「○常也。○一曰知也。」は○を「当然意に作るべき」と誤りと断じ「志與識古皆通用。心之所存謂之意」とし、「知、識_書也」として関連付けるに『大學』を用いる。

(2) 知は「○_書也。」だが(1)に揃え「識_書也」とする。段注「○从口矢」は「識敏、故出於口者疾如矢也」といい、知と矢とが結びついた。

(3) 記「○正也」と疏を改めたのは轉注に因り、『廣雅』曰「註・紀・疏・記・學・栞・志、識也」と轉注説を引く(今文で疏に作る)。

(4) 智(知)「○識_書也。○从白亏知」は(2)知と通用し知の説解を改めた理由とする。

(5) _書「意内而言外」は凡例に相当する。「意内而言外」に深く関係するのが「意」に見える例(言、即ち発言部分)で実例であろう。凡字段注にも関連文字がみえ引用書は『尚書』、『周禮』(「保章氏」から例は始まった)、『春秋左傳』と『春秋繁露』(吉凶禍福をいい、『白虎通(義)』が関わる)である。「言」についての用例は、『論語』や「大學」から誠(言^{口にすることば}がまこと)字、信字(「人が口にすることばは^{まこと}信」、誠と轉注)も採られ少なくない。轉注実践の典型で「言」とも関る「意」は_書や凡字の段注、及びその他の段注にも見え、段氏にとって特別な意味をもつ鍵詞と考えられる⁽¹⁾。例が段玉裁にとって適切なものであれば、畢生の大著段注になぜこのように「内なるココロをコトバとして発する」例をある段注に集中させたのだから。著者段玉裁の執筆の意図を理解することが読者に委ねられたと今もなお考える。

注

(1) 近藤光男先生『漢詩大系 22 清詩選』(集英社、1967)に詳しい。また大橋「内なるココロを表出する一段注の「_書」を中心に―」(『國學院雑誌』117、2016)・「段注における_書について―挙げられた凡例を中心に―」(『國學院中國學會報』66、2020)参照。

(2) 劉盼遂編『段玉裁先生年譜』(『段玉裁遺書 上』所収)参照。また、大橋「『説文解字』研究一段注に散見する江蘇記載部分に関する一考察―」(特に交友関係部分)『人文学報』198、東京都立大学

- (3) 15篇上叙「六日轉注。轉注者建類一首、同意相受、考老是也」を互訓の凡例として重視し部首8上67a「老、考也」と68b「考、老也」までの文字配列は様々な意味の連関で続く。本義を理解して順を追って読むと想定してあると考えられ、最後に置かれた考はそれ以前の義のつながりの結果の総括的義とし一括の上次の考で老部は終る。本来心部は「意、志也(1部)」、「恠、意也(15部)」と続く。志から互訓で意、恠と続き轉注「建類一首同意相受」としてまとまる。段氏が古音説で15部が1部と通じる合韻の2字とはやや異なる意味・意義をもつ假借と説く恠(15部)は総括的な意味とならない。原則は意味を追って順番に読んでもなお最後に排された理由は察せねばならない。

また、「異字同義」と説く轉注では一字に複数の字義があるように見える。夙に經部小學類『爾雅』「釋詁第一」劈頭にある「初、哉、首、基、肇、祖、元、胎、俶、落、權、輿、始也」は異なる13字が全て最後の「始」義といい、段注は叙で最初に創造された文字の用法として轉注があるとする戴震転注説の根拠とする。文字は使われるために創造されたと長く考えられてきたと段注は叙で最初に説く(15篇上1a以下)。文字にはそれぞれ専用の義(本義)があり更に共通する義の部分をもって通じる他の文字で用いられれば、その差異分だけ表現力の豊かさが広がり適切に使い分けられることになる。専用の字義をもつ或るモジAが同様に専用の字義を持つ異字Bと通じれば、AはBと共通の字義で用いたとしても本来の字義との隔たり、差異の分だけ幅がでる。読者にその差異分だけの筆者の主張・個性を示すことができる用法と筆者は理解する。

- (4) 12上42b擬「○度也」、14下26b疑「惑也(語其切1)」ではこの2字の関連につき共に段注で言及しないが、『儀禮疏』「卷7士相見禮(士以職位相親始承摯相見禮:士はその職位をば以て相いに親しみ始めて摯を承け相いに禮を見る)」「則正方不疑君」の鄭玄注に「疑、度之」、後述「既夕禮」鄭玄注に「志猶擬也」とある。『儀禮』研究をした段氏は知っていたはずで本稿では「はかる」と読む。
- (5) 『左伝』に「志」字は少なくなく、引き方は一見恣意的に見えても明瞭な自説の根拠として可能な限り多くの例を示すのは、段氏の考証学的態度から当然で(注1)、基本義の発展・派生の有様が筋立ち理解し易いよう努めると考える。また師説を巧みに活用し態勢を万全と整えて論じる態度は、駁論など排除するかと畳みかけるようでもある。そのための厳選し抜かれた典故ならば、一書、その掲載章(句)全体が段氏には意義があり、内容・主張をもつと筆者は考える。

参考文献(補)

- ・ 頼惟勤先生 監修 説文会 編『説文入門一段玉裁の「説文解字注」を読むために』(大修館書店 1983年6月)
- ・ 近藤光男先生『清朝考証学の研究』(研文出版 1987)・『清朝考証学の研究』(同上 1987)
- ・ 赤塚忠『大学・中庸』(新釈漢文大系 明治書院 昭和44)他